

## 地域貢献する看護スペシャリストの実践報告

稲城市立病院 特定看護師 統括看護科長  
山村若菜

### 【目的】

当院は自治体病院であり、「行政と連携し、地域と密着な医療の提供」の実践が求められている。当院が地域包括ケアシステムにおける中核病院としてユビキタスケアのためのチームングを実践していくために、看護のスペシャリストである特定看護師・認定看護師らが、地域の訪問看護ステーションと共同で「訪問看護活動」を開始したので、その活動内容と成果を報告する。

### 【実践症例 1】

30 歳 男性 独居 現病歴：神経因性膀胱 既往歴：頸椎損傷による下半身麻痺

介入経緯：

当院泌尿器科外来通院中で、週 3 日の訪問看護と週 7 日の介護ヘルパーを利用している。自己導尿を 1 日 4 回実施しており、昨年より不定期に繰り返す発熱と膀胱炎症状がある。訪問看護師より「導尿手技やカテーテル管理をみてほしい」と依頼があった。

活動内容と結果：

感染管理認定看護師の介入により、手技上の問題として「尿道口の消毒をしない」ことや「尿道カテーテルを数日使いまわしている」、「尿道カテーテル保存時の消毒液が 1/3 しか入っておらず、カテーテルが消毒液に完全に漬かっていない」ことなどが判明した。患者自身も繰り返す膀胱炎症状を改善したいと考えており、指導を実施した。その後外来看護師に情報提供し、継続的な指導を依頼した。その結果、繰り返す膀胱炎症状は消失した。

考察：

慢性疾患をもち、永く療養生活を送る患者の自己管理方法は、良きも悪きにも自己流となっている場合が多い。この患者の場合、患者自身も現状を改善したいという前向きな気持ちがあったことに加え、感染管理認定看護師が介入することにより、実質的な問題点を抽出することができ改善につながった。

### 【実践症例 2】

80 歳 男性 妻と二人暮らし 現病歴：多系統萎縮症、パーキンソン病、糖尿病、神経因性膀胱、仙骨部褥瘡 (D3-E6s6 1 0 9 3N3P9: 27 点) 大きさ 4.5×2 (5.5×3.5)

介入経緯：

介護認定は要介護 1 で、褥瘡処置で週 7 日の訪問看護を利用している。「褥瘡の状態に変化がみられているためみてほしい」と依頼があった。

活動内容と結果：

入院中と自宅療養との ADL 違いにより、創部への負荷が左右非対称となって仙骨部褥瘡の右半分がフラップとなり肉芽増殖が左側に偏りがみられていた。皮膚・排泄ケア認定看護師の介入によりポジショニングを調整し、退院時に指示されていた処置やケア内容を在宅で実践可能なものに変更した。その後患者が当院皮膚科外来患者であるため、主治医に訪問時の状況を報告し速やかに対応した。

考察：

褥瘡の場合外来通院は 1 回/2 週~1 ヶ月で、処置の内容は次回の外来受診まで変更されない場合が多

い。そのため創部に変化がみられたとしても、対応が遅れてしまうことが多い。この患者の場合、創部の異変を訪問看護師が気づき当院の皮膚・排泄ケア認定看護師が介入したことにより、早期対応ができた事例であった。

### 【実践症例 3】

75 歳 女性 独居 現病歴：糖尿病性皮膚潰瘍、神経障害性皮膚潰瘍、頸椎圧迫神経障害

介入経緯：

当院皮膚科外来に糖尿病性皮膚潰瘍により通院中の患者で、訪問看護ステーションより「患部の状態が悪化していると感じるが、患者からは受診時の患部の評価状況や処置の実際が伝わってこないため情報がほしい」といった依頼であった。

活動内容と結果：

当院入院中に病棟スタッフであった緩和ケア認定看護師が、患者が外来受診時に付き添い診察内容や指示された処置内容等を掌握し直接訪問看護師に情報提供を行った。

考察：

高齢化している患者らは、訪問看護師に外来受診時の状況など必要な情報を伝えることが難しい。当院看護師が診察時に付き添い、必要な情報を十分に訪問看護師に伝えることにより、スムーズでありかつ良好なケア提供につなげることができた。

### 【実践症例 4】

81 歳 女性 独居 現病歴：低カリウム血症、慢性腎不全 PICC カテーテル挿入中

介入経緯：

当院の医師が PICC を挿入した患者で、訪問看護師より「PICC カテーテルの固定がうまくいかずに困っているため、見に来てほしい」と依頼があった。

活動内容と結果：

特定看護師が訪問し観察したところ、固定方法に誤りがあり、十分な固定がなされていないことが分かった。特定看護師により応急的な固定を行い、後日当院受診し再固定を行った。

考察：

医師による固定方法の不備であり、PICC カテーテルについて熟知していなければ判断できないトラブルであった。PICC カテーテル挿入を行う特定看護師が観察し状況を把握して医師に状況を的確に伝えることにより、速やかな対応ができた症例である。

### 【おわりに】

『連携とは、連携定型の意。連絡を密に取り合って、一つの目的のために一緒に物事をする』とある。(大辞林) 患者らが、少しでもながく住み慣れた地域で生活を送れるよう、地域・在宅など様々な場所に向いて、医療・介護の方々と一緒に物事を成し行動することが看護師に求められる『連携』であると考え、今後もこの活動を続けていきたいと考える。